

全国盲ろう教育研究会 会報 第13号

2015. 1月発行

全国盲ろう教育研究会事務局

各地から新春の便りが届きました。皆様にとりまして、実り多い1年となりますように研究会としても情報発信に努めていきたいと思っております。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

●全国盲ろう教育研究会第12回研究協議会・定期総会報告

2014年8月9日・10日に全国盲ろう教育研究会第12回研究協議会を開催いたしました。台風が猛威をふるい、交通機関が乱れる中でしたが、全国各地から多くの方が集い、講演や実践報告等に耳を傾け、分科会や懇親会では時間を惜しんで語り合いました。

開会の挨拶で、中澤会長より「障害者の権利に関する条約」の政府公定訳 第24条教育の項目の中に、「盲人、聾者又は盲聾者」という語が入ったこと、当初は、「who are blind, deaf or deafblind」の仮訳が「盲人、聾者又はこれらの重複障害のある者」と訳され、盲ろうと訳されていなかったことに対し、盲ろう関係団体等の粘り強い働きかけにより「盲聾者」ということばが入ったことの成果、それは、独自の障害としての盲ろうの認知と今後の盲ろう教育・福祉の充実に繋がることであることが説明されました。そして、権利条約の審議にあたって、世界盲ろう者連盟が国連において非常に大きな努力をして「deafblind」の語を入れたことがその背景にあることが説明されました。



そして、「先天性盲ろう児のサインの出現と理解について」をテーマに、ネットによるフランスからのライブ講演が行われました。オランダ フローニンゲン大学大学院講師（フランス盲ろう学校・元校長）のジャック・ソリオ氏は、海外で培った盲ろうに関する知見をもとに、理論的なビデオ分析を通して、

盲ろう児者の思いや考えを読み取る力、表出するサインの意味を探ることの必要性について話していただきました。

「盲ろう児の学びと育ちを支える関係機関連携」と題した実践報告では、保護者の方、福音ルーテル教会大岡山幼稚園、筑波大学附属視覚特別支援学校幼稚部よりそれぞれ報告いただきました。盲ろう児の成長と共に、支援機関の連携の大切さを考えることができました。

2日間の様子を紙面にて報告いたします。

*なお、事務局の責任において概要をまとめさせていただきましたこと、実践報告者等の所属については、研究協議会時の所属で記載させていただいたことについて、ご了承下さい。

●第12回定期総会報告 【8月10日 9:20~9:45】

会長挨拶後、出席者数・委任状数を報告・確認し、議事案件の審議に入りました。

・議案1 2013年度事業報告

1. 運営委員会を6回開催し、運営基盤の整備を図った。
2. 全国盲ろう教育研究会会報に総会および研究協議会の報告を掲載・配布し、啓発活動をすすめると共に、会員の獲得に努めた。
3. 全国盲ろう教育研究会会報を発行し、教育研究の向上に寄与すると共に会員相互の情報交換に役立てた。
4. 全国盲ろう教育研究会第11回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上を図るとともに、第12回研究協議会の準備を進めた。
5. 「盲ろう教育研究紀要第11号」の発行に向けて編集作業を行ったが、発行できなかった。
6. Webサイトの充実を図ったが、十分な活用と情報交換には至らなかった。

○原案通り、了承されました。

・議案2 2013年度会計報告

以下の通り、報告がなされました。

【2013年度全国盲ろう教育研究会会計報告】

【収入の部】

*単位は円

項目	2013年度予算	2013年度決算	備考
前年度繰越	290860	290860	
年会費	280000	244,000	2014年3月31日現在、会員数134名。年会費納入者100名、納入122口。
ご寄付	—	17552	
利息	—	90	
合計	570860	552502	

【支出の部】

*単位は円

項目	2013年度予算	2013年度決算	備考
定期総会報告書発送費	30000	15144	会報第12号に定期総会報告の内容を含めた。
会報発送費	30000		
第11回研究協議会案内発送費	60000	30445	
研究紀要発行費	200000	0	2013年度内の執行に至らず、2014年度に執行することとなった。
研究紀要発送費	60000	0	
Webサイト維持費	35000	21892	
事務費	70000	34406	
会議費	70000	36780	第76回～第81回運営委員会（交通費実費）。
予備費	15860	0	
合計	570860	138667	

残金413835円【収入552502円－支出138667円】は次年度に繰り越します。

○原案通り、了承されました。

【第11回全国盲ろう教育研究会研究協議会会計報告】

【収入の部】

* 単位は円

項目	金額	備考
参加費	249000	会員3,000円×47名、非会員4000円×27名（報告者は参加費なし）
懇親会費	114800	2,800円×41名
弁当代	34300	700円×49名
第10回繰越金	398165	
合計	796265	

【支出の部】

*単位は円

項目	金額	備考
事務費	19364	
懇親会費	114800	2,800円×41名
弁当代	34300	700円×49名
情報保障費	84010	
保育雑費	16318	
講師謝金・交通費	16220	
合計	285012	

残金511253円【収入796265円－支出285,012円】は、今後の研究協議会での情報保障費として使用します。

○原案通り、了承されました。

・議案3 2014年度事業計画

以下の通り、提案がなされました。

1. 定期的に運営委員会を開催し、運営基盤の充実を図る。
2. 全国盲ろう教育研究会総会・研究協議会報告を広く配布し、啓発活動をすすめると共に、会員の獲得に努める。
3. 全国盲ろう教育研究会会報を発行し、盲ろうに関する情報提供を行うと共に、会員相互の情報交換に役立てる。
4. 全国盲ろう教育研究会第12回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上を図るとともに、第13回研究協議会の準備を進める。
5. 「盲ろう教育研究紀要第11号」を発行し、「盲ろう教育研究紀要第12号」の発行に向けて編集作業を行う。
6. Webサイトの内容の充実と活用を図り、情報提供および情報交換を図る。

○原案通り、了承されました。

・議案4 2014年度予算

以下の通り、提案がなされました。

【2014年度国盲ろう教育研究会予算案】

【収入の部】

* 単位は円

項目	金額
前年度繰越	413835
年会費 (2,000円×130名)	260000
合計	673835

【支出の部】 * 単位は円

項目	金額
定期総会報告書発送費	45000
会報発送費	45000
第12回研究協議会案内発送費	60000
研究紀要第11号発行費	200000
研究紀要第11号発送費	100000
Webサイト維持費	35000
事務費	100000
会議費	70000
予備費	18835
合計	673835

○原案通り、了承されました。



●全国盲ろう教育研究会 第12回研究協議会報告
○講演概要 【8月9日】13:45~17:15

「先天性盲ろう児のサインの出現と理解について」

オランダ フローニンゲン大学大学院講師

フランス盲ろう学校・元校長 ジャック・ソリオー氏

私は、1970年から96年までフランスの盲ろう児のための学校で仕事をしていました。風疹によって盲ろうになった多くの子どもたちが在籍していました。1996年から2006年までは盲ろう支援センターの所長をしていました。これらの間、全ヨーロッパの国々と連携して、盲ろうの子どもたちのコミュニケーションについて研究することを続けてきました。



今回、講演を聴いてくださる方々の中にご家族の方がいらっしゃることを盲ろう学校で校長をしていたときの経験から大変嬉しく思います。

【スライドに沿って講演】

まず、ノルウェーのフレデリック君という5歳の盲ろうの男の子の話から始めます。先天性の盲ろう児で、人工内耳をつけています。水頭症です。彼は両親と自宅で暮らし、盲ろう学校に通っています。気分が良い時は、全身を使って外界を探索します。嬉しい、悲しいなどの表情が豊かです。手に触られるのを大変いやがるので、サインを手にする事ができないため、比較的、触覚を受けてくれる顔や頭がサインを受ける場所になっています。

ご家族など関わる人たちと交渉を経て、共に創ったいくつかのサインを持っていますが、地下鉄のサインは、おでこの上に、ジグザグに形づくった手を動かすことです。時に、自分でおでこにそのサインを出すことがあります。

では、実際に地下鉄に先生と乗っている場面の映像、そして学校での場面の映像をみてください。

【映像（地下鉄に乗っている場面、学校での場面）に沿って解説】

地下鉄にフレデリック君と担当の先生が乗っている場面です。〔映像〕移動には、よく地下鉄を使っています。

次に、学校において、やりとりをしている場面を見ていただきます。〔映像〕

担任教諭は、ネームサインであるほっぺたをチョンと触わることをして、フレデリックの表情から神経質な感じになっているので、何だろう？と思い、おなかを触って、「おなかがすいたの？」と尋ねます。フレデリックは、その手を押し返しています。フレデリックの言いたいことが担当教諭にわからず、現実場面の「椅子に座っているね」と繰り返しています。座っていることを伝えるために椅子をちょっと動かしています。

すると、フレデリックはおでこを触り、頭を右左と動かしています。そして、座り直しをして、後頭部を背もたれの上の方に押しつけるようにして、動かしています。そして、手をおでこの上で動かしている様子から、担当教諭は「あなたは今、地下鉄のことを考えているんだね。」と伝えます。フレデリックは、自分が地下鉄のことを考えているということを相手がわかってくれたということが嬉しくて笑顔になっているのだと思います。

最初、おなかがすいているの？と聞いたけれど、どうも違うと思って、椅子に座っているの？と切り替え、椅子を揺らすことで地下鉄に結びつきましたが、実はもっと早い段階でフレデリックは地下鉄のことを考えていたと思います。おなかがすいているの？と聞いたときの反応を見て違うと判断し、椅子に話題を変え、揺らしているときに、フレデリックは座り直し、表情が和らいできます。地下鉄に乗っている時の姿勢とほぼ同じ姿勢になります。地下鉄に乗っている時も身体を左右に動かしたり、後頭部を背もたれの上の方に押しつけるようにして、小刻みに動かしていますので、実はこの時、地下鉄のことを考えていたのではないかと推察します。そして、おでこを触り始めたところで、担当の先生も地下鉄のことを気付くわけです。

現実の中で、椅子を揺らすことで、過去そこで行われた記憶が引き出され、同じような経験をした地下鉄に乗った記憶が呼び覚まされる、ということ、それを、もし、ことばで表現するなら「ねえ、レベッカ先生、椅子を揺らしているの、地下鉄に乗っていることを思い出してしまったよ。」というような脳の活動です。

*このように、映像をもとに、子どものしぐさ・行動から子どもの思いや感情を読み取ることをいくつかの事例をもとに説明していただきました。

子どもたちがおかれている現実、過去の記憶、イメージ、感情、それらを統合して子どもたちがどう捉えているのか、探ることは難しいけれど、でも、とてもロマンがある取り組みであること、そして、子どもが持っている可能性はとても大きく、それを引き出すのはおとなの役割であり、関わる人が感受性を磨くことの大切さを語られました。

「盲ろう幼児の学びと育ちを支える関係機関連携」

保護者

福音ルーテル教会大岡山幼稚園

福音ルーテル教会大岡山幼稚園

筑波大学附属視覚特別支援学校

園長

前教諭

幼稚部

田中 麻友 氏

桑原 泉 氏

熊谷 梓 氏

高見 節子 氏

保護者 田中 麻友 氏

娘 Rのプロフィールは以下の通りです。
 現在、6歳、筑波大学付属視覚特別支援学校小学部の1年生です。

<眼疾患>

ピータース奇形・虹彩低形成・白内障・
 第一次硝子体過形成遺残

視力 右 0.005 左 光覚

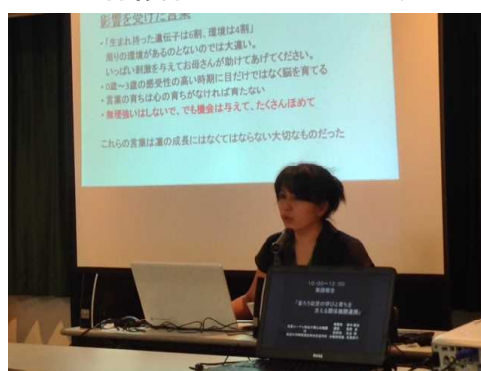
<耳疾患>

蝸牛低形成・高度感音難聴

裸耳聴力 70dB程度 両側補聴器装用（1歳3ヵ月より）

<コミュニケーション手段>

音声言語・点字（習い始めて4ヵ月）



成長の過程を振り返ると、ご飯が食べられるようになり、成長が加速し、補聴器を着けてから周りへの興味が広がったと思います。

子育ての中で、次のことばに影響を受け、大切にしてきました。

- ・「生まれ持った遺伝子は6割、環境は4割」
- ・周りの環境があるのとないのでは大違い
- ・ いっぱい刺激を与えてお母さんが助けてあげてください。
- ・ 0歳～3歳の感受性の高い時期に目だけではなく脳を育てる
- ・ 言葉の育ちは心の育ちがなければ育たない
- ・ 無理強いはしないで、でも機会は与えて、たくさんほめて

そして、いろいろなところでのアドバイスを元に、次の事項を大切にし、意識して働きかけてきました。

- ・ 心に寄り添う（思いに同調する）

転んだ時には「大丈夫？」ではなく「痛い」と本人の思いに寄り添う
楽しい時には一緒に笑い、悲しい時は一緒に悲しむ

- ・ 言いたい言葉を代弁する
- ・ Rが言葉を発した後は正しい言葉（発音）を繰り返す
- ・ 擬声語・擬態語をたくさん使ってイメージを作るように
- ・ 体験を通して理解することを心がける

牛乳を飲むときは、牛乳パックを冷蔵庫から出してコップに注いで、牛乳パックを冷蔵庫にしまうという一連の動作を一緒にするなど

- ・ 規則正しい生活をする
- ・ 何かやる前には事前のことばかけ、見通しをもたせる

でも、お友だちの家に行って、お弁当を食べるよと言う見通しを話したことで、お友だちの家に着くなり、お弁当を食べると言い出すなども・

- ・ わかりやすい配置にする
- ・ 疑問は何でも口に出してみる

しかしながら、日々過ごす上で、イレギュラーなことがあると納得ができず受け入れが困難だったり、なんとなく過ごすことの難しさ、待つことの難しさも感じてきました。

【映像を交えながら成長の過程をご報告いただきました】

1歳3ヶ月、聴覚の診断が出た時に、それまで通っていた筑波大学附属視覚特別支援学校の他に、1歳年齢を下げて、附属聴覚特別支援学校の育児学級に通い始めました。そして、3歳の春に、障害のある幼児も受け入れている福音ルーテル教会 大岡山幼稚園に入園すると同時に、附属視覚特別支援学校幼稚部の年少組に入学しました。幼稚園では社会性を育み、視覚については視覚特別支援学校で支援を受け、聴覚については聴覚特別支援学校で支援を受けるということが続けてきましたが、この3つの機関のどこが欠けても今のRの成長はありませんでしたし、なくてはならないものでした。

妹弟の存在について話したいと思います。2歳3ヶ月、妹が生まれました。ママが突然いなくなってしまう、戻ってきたら、なんだかよくわからないものが一緒にいる、そのわからないものが泣いていると、ママが行ってしまう、そして、自分も悲しくなり泣いてしまいました。そのうち、妹の音がすると近くに寄り添い、ご飯をあげるお手伝いやブランコを押してあげたり、手遊び歌を教えるなどしました。そして、今では、Rの一番の理解者になりました。そして、4歳7ヶ月の時に、弟が生まれましたが、この時は、お腹が大きな頃から

生まれてくる赤ちゃんを楽しみにするようになり、生まれてきた当初は、妹と同じように一緒に遊ぼうとしたり、一緒にご飯を食べさせようとしたりしましたが、5歳になった頃には、そのうちお話ができるようになることや一緒に遊べるようになることがわかるようになりました。女の子と男の子の身体の違いも弟とお風呂に入っていた時に世紀の大発見をしました。2人のお姉さんになり、とても成長しました。親にはできない子供同士のやりとりがあり、妹弟の存在はかけがえのないものになっています。

今現在、1年生になり、毎日楽しく通っています。日常会話はかなり滑舌よくお話できるようになり、一日中しゃべっていることもあります。点字を学びだし、教科書や本を読むことが楽しくてしかたない様子です。好奇心も旺盛で、気になることはなんでも質問しています。でも、難聴ゆえの授業・学校生活の理解の難しさなどの心配が把握できないことも出てきていると思います。

以前は、大きくなったらママのように、赤ちゃんを産めるような人になりたいと言っていました。が、小学生になった今は、学校の先生になりたいと言って、そのために勉強しなくちゃいけないの！と張り切って家でよく勉強をしています。

盲ろうであったために、より心を育てなければいけないと思ったのかもしれない。多くの方と関わり、出会ってきた人と人との繋がりが娘を育て、家族を支えてくれました。



福音ルーテル教会大岡山幼稚園園長 桑原 泉 氏

私どもの幼稚園、福音ルーテル教会大岡山幼稚園は、静かな住宅街にある教会附属の幼稚園です。3歳から5歳までの幼児が127名在籍しています。教師は、8名、そして障害のある幼児もたくさん入っていますので、援助者として、今年度は16名の方に登録していただいています。

Rちゃんは、未就園児クラスに親子で週1回登園し、3歳児は週3日登園、そして、4歳児・5歳児はできるだけ他児と同じ経験をさせたいと週4日登園していました。年少時より、担任の他に、援助者を常時付けてきました。

園の基本的な考え方や特徴は、以下の通りです。

・幼稚園では、40年以上前から障がい児を受け入れ、健常児との統合保育をしている。

- ・長年、統合保育をしていることが知られている。
 - ・必要であれば、援助者を付けている。
 - ・キリスト教精神に則り、一人ひとりいろいろな個性を持った子どもたちがいるけれど、その一人ひとりを神様から与えられた大事なこどもとして育てている。
 - ・園に毎年10名くらいの障がい児がいる。各クラスに何人かいることもある。
 - ・こどもたちや保護者等の周りの方が理解し、障がい児を受入れている。
 - ・自由に遊ぶ時間を大切にしている。
 - ・縦割り保育をしている： 異年齢のこどもと遊ぶ時間を大切にしている。
- こういった幼稚園の中で、好奇心の塊のようなRちゃんのはのびのびと活動してきました。

福音ルーテル教会大岡山幼稚園 前教諭 熊谷 梓 氏

Rちゃんとの出会いは3歳児の時、そして年中の1年間は担任として関わりましたが、友だち関係が広がった時期です。

入園当初は、母親からは離れられず泣く日が続きましたが、一学期中旬頃から、泣かずに登園できるようになりました。一人の空間でじっくりと園の遊具で遊び楽しむ姿が見られるようになりましたが、友だちが触れると、手を振り払う時もありました。園生活に慣れ、行動範囲が広がるにつれて、他児がたくさんいる遊びの場に身を置くようになり、周囲の会話に耳を傾け、真似する姿も見られるようになりました。

4歳児クラスへ進級に際して、Rちゃんの障がいについて丁寧に説明があり、登降園の際には園での様子や家での様子を伝え合い、Rちゃんの姿について共通の理解を深めていきました。園生活で困難を感じる様子を伝え、関わり方や支援を一緒に考えて、援助者とも共通理解がとれるようにしました。

視覚特別支援学校との連携を大切にし、以下の点で具体的な支援の在り方を考える助けとなりました。

- ・環境への配慮
- ・園内の教師や援助者との共通理解
- ・表現活動への配慮（制作や絵画活動、体操、手遊び、劇遊び、絵本や紙芝居）

援助者については、曜日ごとに固定された4名が援助を行いました。新たな保育室に慣れ、室内の物の位置関係を把握できるようになるために、進級当初は、園生活の中で、場所の名前やその意味を伝えながら過ごしてもらうこと、危険な行動や場所はその都度注意してもらうこと、伝える際には言葉だけでなく、Rちゃんが理解しやすいように、実際に触れることができるよう援助してもらうことなどをお願いしました。

進級当初は不安な様子が見られましたが、同じクラスだった女児とヒモ通しをして遊ぶことで、次第に新しい保育室の環境に興味を持つようになりました。登園後は新しい保育室を探索し、保育室の壁面に飾られている装飾、遊具や絵本に触れて興味を持ったものを試して過ごしていました。自分のロッカーや下駄箱の場所をすぐに覚え、援助者と一緒に支度をすませ、自分のしたい遊びを見つけ楽しめるようになりました。園内の行動範囲も広がり、保育室内のおままごと、外遊びでは滑り台や砂遊びを楽しみました。2階ホールで5歳児クラスが育てている野菜にRちゃんの好きなピーマンや茄子があり、毎日野菜に触ることを楽しみにしていました。

年中の1年間は友だち関係が急速に広がった時期でもありました。以前より言葉がはっきりするような機能的な要因もありましたが、Rちゃん本人の園生活や活動に対する意欲が、友だちとの出会いを生み出しました。気持ち、明るさ、楽しさ、嫌な気持ちにさせない断り方、努力する姿などの良い面を友だち関係の中で発揮し、友だちに認められる経験をすることができてきました。Rちゃんの自分のことは自分ですという気持ち、それが出来るようになるための視覚特別支援学校での支援を通じた自信、そして保護者の方に愛されているという安定した信頼関係が、障がいという困難さと集団生活の橋渡しになっていたように思います。

盲ろう幼児と健常児の関わりを通して子どもたちは、障がいの困難さを越えて、子どもたちなりの関わり方を生みだし、友だちの存在の意味の幅が広がったように思います。障がいのある子どもにとってよい指導は、健常児にもよい指導であり、障がい児に配慮した保育を行うことで健常児にも良い面がありました。統合保育の場面では、担任だけでは保育を進めていくことが困難な状況が起きます。しかし、担任と保護者、援助者、保育者間、園長、視覚特別支援学校など様々な立場の連携を通して、子どもたちの関係性に対して援助の方向性を導くことができました。子どもを取り巻く大人の関係性の在り方が、子どもの育ち合いと、困難な育児を有する母親を支える環境になるのではないかと強く思いました。



筑波大学附属視覚特別支援学校幼稚部 高見 節子 氏

本校幼稚部では、視覚に障害のある乳幼児の早期教育支援、地域の保育機関等に通っている視覚に障害のある幼児の教育支援に力を注いでいます。

R児は、10ヶ月の頃に本校の教育相談を受け、その後育児学級に参加するとともに、附属聴覚特別支援学校の乳幼児相談を受けていたので、附属聴覚特別支援学校の乳幼児相談の様子を見学したり、ケース会議を実施し、それぞれの活動内容、指導内容について話し合いを行いました。3歳児になり、週2日（木・金曜日）本校に通学し、そのうちの木曜日は月2回程度、附属聴覚の乳幼児相談のけやきルームに参加、週3日（月・火・水曜日）は大岡山幼稚園に通うという形態をとり、4歳・5歳児では、本校には週1日、大岡山幼稚園には4日通園し、附属聴覚には、月1回の教育相談、聴覚検査、発音指導を受けてきました。

保育活動では、以下を大切にしてきました。

- ・ のびのびど遊びを楽しみ、充実感に満たされるために、R児との十分な信頼関係を築き、安心のできる環境をつくる。
- ・ R児の行動、表情や気持を丁寧に受けとめ、語りかけ、言葉かけを行い、応答する環境を作り、主体的行動を働きかける。
- ・ 身体を動かすことの楽しさを伝え、運動経験を豊かにし、自発的に楽しめるようにする。
- ・ R児の興味、関心に沿った活動の展開し、自分で選び、自分で決める体験を積み重ね、一つ一つの体験に「やったあー」「できあー」の実感が持てるようにする。
- ・ 人との関係を豊かに、共感性を育む
- ・ 実際の体験や触察経験、視覚経験を豊かに組織する。
- ・ 確実にかつ多様な経験を積むことで、言語の適切な理解と、イメージの形成につなげていく。
- ・ 直接体験、経験から言語の基本的な概念を育むようにする。
- ・ 生活習慣の自立を図る。
- ・ 家庭、幼稚園、附属聴覚特別支援学校との連携を図る。

そして、コミュにケーションに関する配慮は、前筑波大学の齋藤佐和先生や附属聴覚特別支援学校の先生方をはじめとして多くの方々から学び、以下を大切にしてきました。

- ・ 言葉かけは、はっきり、ゆっくり、短め（単語で区切る）、助詞を意識できるように心がける。
- ・ 言葉の意味がわかることを大切にし、一つ一つの行動を言葉で確認する。
- ・ 一方的な声かけにならないように、応答関係をつくっていくこと。話題の場をつくっていく、話題に引っぱっていくこと。
- ・ やりとりの中で、文をのばしていくこと。事実、様子、気持ち、過去の再生

ができるようになることを視点としてしておくこと。

- ・全体指導の場で、個別の問いかけ、働きかけをしてわかったかどうかを確認することも頭に入れておく。
- ・できたことは、言葉で認めてあげる（評価）ようにする。

（3歳児、4歳児、5歳児時のそれぞれの身体の動き、手指の操作性、人との関わり等の様子について映像を示しながら、経過をご報告いただきました。）

関係機関との連携では、保護者の方の協力をいただき、幼稚園、幼稚部のR児の印を同じものからスタートし、幼稚園での保育や附属聴覚での支援の様子を参観したり、話し合いを定期的に行うことや、長期の休みには、本校、附属聴覚特別支援学校、大岡山幼稚園、保護者が一堂に会してのケース会議を実施してきました。小学校入学前には、小学部への移行支援のためのケース会議に附属聴覚特別支援学校の先生にも同席をお願いし、コミュニケーション面での配慮について学ぶ機会を設けました。

R児との関わりの中で、子どもに学ぶ姿勢の大切さ、子どもの理解のためには家庭、関係機関の連携が大切であること、保護者への支援においても関係機関の連携が大切であることを学び、私自身もたくさんの学びを得ることができました。

3機関からの実践報告の後、フロアから附属聴覚特別支援学校で支援を行った来た穴戸淳子教諭から、R児との関わり合いの中で、聴覚の活用、1音1音の意識づけ、口型などに配慮しながら、話したい気持ちを育てること、ことばを発することが嫌にならないように発音を認めながら、繰り返しやリズムカルなことばを取り入れたりしながら取り組んできたことについて報告をいただきました。

★実践報告いただいた田中麻友さんがNHKラジオ第2「視覚障害者 ナビ・ラジオ」に出演し、子育てについて語りました。テキスト版は、以下からご覧いただけます。

<http://www.nhk.or.jp/heart-net/shikaku/text/20141228.html>

○テーマ別分科会 【8月10日】13:30~15:00

以下の5グループに分かれてディスカッションを行いました。

① 盲ろう幼児児童生徒を初めて担当したあなたへ

参加者：4名（教員、福祉関係者）

少人数であったため、今、現在、担当している盲ろう児・者の様子やその中で課題と感じていること、当分科会で話題としたいことなどをざっくばらんに出し合いました。

そして、「盲ろう児と関わる時の基本原則」を確認しながら、今の取り組みを振り返るとともに、次の課題をどこに設定していくのか、それぞれの事例について、オブジェクトキューの活用やコミュニケーション方法などについて意見交換を行いました。

特に、教育相談に2・3ヶ月に1回、来校する種子島のもうすぐ3歳になる盲ろうのお子さんと保護者への支援について、限られた時間の中で、何を優先すべきか、お子さんに来校の見通しをどのようにもってもらうのかについて意見を出し合いました。「また来たい！ここで遊びたい！」という期待感を持ってもらうために、大好きな揺さぶり遊びをして、その遊びのオブジェクトキューを活用することや日常的な支援を行うための関係機関との連携など、意見交換を行いました。

（文責：星 祐子）

② わかりやすく活動しやすい教室デザイン、オブジェクトキュー

参加者：5名（特別支援学校教員）

会場校である附属視覚特別支援学校の保育室の環境整備を元に、畳、絨毯などの素材の違いによって、コーナーを分けていること、場所の違いで活動の違いを伝え、子どもたちに気持ちを切り替えていくことを伝えていけるのではないかと、といったことや幼児にとって、触った物への興味を大切にすること、そのために安全面への配慮をしながら、たくさん探索できるような環境をつくっていくことの大切さを確認しました。その際に、子どもの生活、目線を大切に、興味や関心を大事にした環境作りが大切なのではないかという話しをしました。「わかりやすく活動しやすい」ということは、わかることで動ける、安心して動けるということで、その中で主体性が生まれ、意欲に繋がっていくのではないかと、そういった見通しをもって環境をつくっていくことが大切ではないかと確認し合いました。

また、「わかりやすく活動しやすい環境をつくること」がゴールではなく、その中で、子どもたちが生活をし、体験をし、子どもの心が動いた瞬間に、その子どもの思いの背景に合わせたことばをしっかりとかけて、それを子どもと共有したり、共感していく中で、子どもの内面を豊かにしていく、それが教員の役割ではないかといった話題になりました。

（口頭報告：加藤 敦）

③ 子どもの主体性を育むICT

参加者：7名（盲ろう児の保護者、教員、施設職員）

昨年度から行っている分科会で、昨年度からの継続参加者が4名、新規の参加者が3名でした。

まずは、盲ろう者が使えるICT機器の種類をあげてみました。全盲ろう・点字使用者が使える物として、ブレイルセンス、ブレイルメモなどの機種、弱視難聴・弱視ろう者が活用できるであろう物としてiPadの筆談ソフト、拡大ソフト、デイジー図書用の閲覧ソフト、トーキングエイドなどを紹介しました。

盲ろう者用に開発されたICT機器はほとんどないので、視覚障害者用に開発された既存の機器類iPad用のアプリ等から有効と思われる物を活用するしかないだろうという話しになりました。また、コミュニケーション機器として、音声認識システムを利用してリアルタイムで電子データ化するとか、電子データを点字化するといったことがかなり実用化の段階になっていること、開発者に働きかけていく必要性などについても話題も出されました。

また、今年度から全国の特別支援学校高等部1年生を対象に、就学奨励費で、ICT機器購入補助費が奨励費として支給されるようになり、学校としてどういう物を購入すべきかといった情報交換もしました。

（口頭報告：雷坂 浩之）

④ 生活に役立つ手話・サインの導入 Aグループ

参加者：15名（盲ろう児の保護者、盲ろう当事者、支援者、教員、医療・福祉関係者など）

9日に講演していただいたジャック・ソリオ氏らが1994年に製作したDVD「コミュニケーションの発現」（原題：'Emergence of Communication'）から、'Congenital Deafblindness and Social Interaction -Pre-conditions for Communication Development' を素材に、コミュニケーションの場면을視聴し、感想を語り合いました。

まず、中澤恵江氏より、このDVDが作られた背景の説明があり、ヨーロッパにおける盲ろう児教育の潮流について解説がありました。その中で、「コミュニケーションを教える」というスタンスの方法では自分からの発信が乏しい盲ろう児が育ってしまうのではないかということが言われるようになった、という話は印象的でした。子どもからの発信を丁寧に読み取って相互のコミュニケーションを築くことの大切さが見直されるようになり、ビデオ分析や赤ちゃんの研究を盲ろう児教育にいかせるのではないかという発想からDVDが作られた、という話がありました。

DVDの中から、乳幼児期の親子のコミュニケーションの場面を中心に、中澤氏が通訳・解説をまじえながらいくつかの場면을共に視聴しました。一つひと

つの場面を丁寧に視聴することで、参加者が共通の理解を得られる場となりました。見えて聞こえている子であれば視線やうなずきなどで交わすこともできる日常的な愛情表現を、盲ろう児にどう伝えるか、ヨーロッパの身体接触の多いコミュニケーションから学ぶことはたくさんあるようです。

限られた時間のため、すべての参加者が発言することはできませんでしたが、出された感想は、どれも「子どもが楽しんでいることに寄り添ってコミュニケーションを育みたい」「一緒に楽しんで笑う経験からコミュニケーションを深めたい」など、日ごろ盲ろう児と丁寧にかかわっている保護者や支援者のかたがたの姿が目には浮かぶものでした。ある参加者からは、9日のジャック・ソリオ氏講演で紹介されたビデオのなかで盲ろう児が見せた笑顔について、本分科会テーマと結び付けての感想が出されました。椅子に座っている盲ろう児が身体をゆすっていたとき、先生が「電車」というサインを出したことで盲ろう児が見せた最高の笑顔。それは、「電車」というサインがわかったからではなく、自分が電車のことを思い出していたことを相手がわかってくれた、共有してくれたことへの喜びだったのだと思う、と。

生活に必要なサインをもつことの大切さも確認しつつ、コミュニケーションの前提となるのは、盲ろう児の反応をしっかり受け止めて返しながらかかわりを築いていくことであって、そのためには一方的に働きかけるのではなく待つ姿勢や、想像し共感する力が大切、等いろいろなことを考えさせられる分科会となりました。

(文責：柴崎美穂)

⑤ 生活に役立つ手話・サインの導入 Bグループ

参加者：9名（保護者6名、教員3名）

はじめに参加者の自己紹介があり、家庭と学校が連携を密にしながら共通のサインを使うことが重要だという意見がありました。また、手話は視覚中心の言語であるため、盲ろう児が手話を取り入れる際には、盲ろう児にも分かりやすいサインにアレンジする必要があるという指摘がありました。

活動が明確で子どもの要求が出やすい状況として、飲食の場面が子どもとの“やりとり”をするよいチャンスだという話題がありました。「飲みたい」「食べたい」の要求をサインとして子どもから発信したり、食べ物を指文字で伝えてから食べるようにしたりして食事を楽しむようにしているという内容でした。同じ「飲みたい」のサインであっても子どもによって異なり、本人から出た身振り（しぐさ）をサインに結び付けることが有効だという意見がありました。子どもがする身振りをサインに活用できると、その後も繰り返しサインとして発信するようになり、定着しやすいという意見がありました。また飲食の

話題にかかわって、「ご飯」というサインを共有するための基盤として、「ご飯」にかかわる体験をたくさんすることの重要性について指摘がありました。米をとぐこと、炊飯器で炊くこと、手づかみで食べること、おにぎりを握ることなど、「ご飯」についてどれだけ子どもと大人と一緒に体験を積んでいるかということが大切だという意見がありました。ここから生活全般に話題が広がり、生活の中の様々な場面で、子どもとかかわり手が楽しい体験を豊かに共有することがサインの獲得には不可欠であり、盲ろう児のサインは言葉そのものである、という共通理解がなされました。ジャック先生の講演を振り返り、子どもが日常の中で発する些細なしぐさなどをつい見逃したり見過ごしたりしているであろうという反省がありました。些細なしぐさを丁寧に子どもに返していくかかわりの中に、子どもと一緒に作り上げるサインのヒントがあるのではないかという話題になりました。

また、サインでやりとりしたいというかかわり手の思いが強過ぎたために、子どもが手を隠すようになってしまったという報告もありました。子どもへのサインが「だめ」「おしまい」などの否定的な内容であったり、「～するよ」「～に行くよ」などの命令的な内容であったりと、サインが子どもをコントロールする道具に偏りがちになっていないかという反省もありました。

まとめとして、「サイン＝言葉」にはその裏付けとなる体験があり、その体験を子どもとかかわり手とが豊かに共有することの大切さを確認しました。その体験をもとに、「サイン＝言葉」が子どもにとって意味のある便利なコミュニケーション手段になるだろうということを共通理解しました。

(文責：上田 淳一)

* 希望者多数により「生活に役立つ手話・サインの導入」分科会を2グループに分けました。



○先天性盲ろう児者の活動プログラム

本年度は5名の先天性盲ろう児者が参加しました。ボランティアさんは10名、毎年の常連ボランティアと学生の方々が力を合わせて、楽しい活動を盛り上げてくださいました。

今年も大変な猛暑でしたが、当日は小雨模様の涼しい日でした。

初参加のSさんは、初日は離れたお母さんを探して校舎を何周も回りましたが、徐々にボランティアさんと仲良くなり、二日目にはお母さんと円滑に別れることができました。ブランコを思い切り楽しんだKさん、Sさん。ボランティアさんを集めて集団活動のリーダー役をしたTさん。今年のメインのプログラムであるアイスクリーム作りを堪能したSさんTさん。ボールプールや風船で遊んだYさん、Kさん。威風堂々、貫禄のRさん。それぞれがお気に入りの活動を見つけてボランティアさんと充実した時間を過ごしました。

グラウンドにあるウォーターベットやシャボン玉や大型遊具で遊んだり、近くのコンビニに行って、好きなおやつを買ったりしました。自分のおやつだけでなく、兄弟にお土産を買った人もいました。戸外の活動もそれぞれのペースで展開しました。

コミュニケーションの方法は、手話、音声、身振りなどそれぞれです。ボランティアの皆さんとの係わり合いの中で、表情や行動スピードの変化、そぶりしぐさなど「行動のことば」で自らの意思や思いを伝え、一緒にお話をしながら楽しい活動を進めました。また、「サポートブック」を持参してくださった方もおり、関わり合う時の参考にさせていただきました。

今年も盲ろう児者の皆さんからたくさんのことを教えていただきました。また来年、皆さんにお会いすることを楽しみにしています。

（文責：井澤 素子、星野 勉）

（文責：井澤 素子、星野 勉）

●運営委員会・事務局より

第12回定期総会・研究協議会にご参加の皆様、お忙しい中、ありがとうございました。ボランティアの方々をはじめとして、多くの方々には、多大なるご協力をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。皆様からいただいたアンケートでは、今後の運営に対しても貴重なご意見をいただくことができました。これからもより充実した研究協議会となるよう努めてまいりますので、今後ともご協力のほど、宜しく願いいたします。

●会費納入のお知らせ

・年会費（2,000円／年）の納入状況を、宛名ラベルの下欄に記載しています。未納のある方は、納入をお願いいたします。ラベル印刷後に納入された場合など、行き違いがありましたらご容赦下さい。

（例）「2014未」：2014年度分未納を表しています。

・ご本人名義で納入してください。「〇〇年度年会費」と記入してください。

◇振込・振替先（みずほ銀行、または ゆうちょ銀行をご利用下さい）

みずほ銀行 本郷支店

口座番号 普通預金 8062806

口座名義 全国盲ろう教育研究会会計 柴崎 美穂

ゆうちょ銀行

口座番号 00100-6-484136

加入者名 全国盲ろう教育研究会

●連絡先変更等のある方は、お手数でも事務局までご連絡下さい。

前全国盲ろう者協会事務局長の塩谷治氏が、昨年6月23日に逝去されました。

塩谷氏は、現筑波大学附属視覚特別支援学校で長きにわたり、国語科教諭として教鞭をとり、その間、在学中に全盲ろうとなった福島智氏の担任となったことをきっかけに、全国盲ろう者協会の設立に尽力され、当校を副校長として定年退職後、全国盲ろう者協会の事務局長を務め、今日の盲ろうに関する制度・福祉等の基礎を築き上げられました。本研究会設立にも多大なるご尽力をいただいた方です。ご遺志をしっかりと受け継いでいかなければいけないと身を引き締めております。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

☆☆お知らせ☆☆

全国盲ろう教育研究会 第13回定期総会・研究協議会

期日：2015年9月19日（土）・20日（日）

場所：四季（とき）の湯温泉ホテル・ヘリテイジ
（埼玉県熊谷市）

内容：1日目 実践報告

ポスター発表

2日目 ふうわとの合同プログラム

分科会

*盲ろう児と家族の会「ふうわ」との共同開催となります。